



## はじめに

現在日本に国宝として認定されたものは1,059点あるとされる(平成13年6月指定分まで)。その全てを見た人は少ないであろうが、一方また、現物、映像、写真の如何を問わなければ、そのひとつとして見たことのない人も珍しいと思われる。大学在学時、京浜急行沿線の弘明寺のすぐそばに下宿していたが、残念乍当時、弘明寺観音像(国重要文化財)は拝見していない。普段は一般公開していなかったため、目と鼻の先には居ても、なかなか間直に接することは適わない。姫路城や松本城のようにそこに行きさえすれば誰でも見る事が出来るものは比較的容易であるが、小物で、しかも、普段一般公開していない国宝を見るにはかなりの努力と経費と時間的余裕が必要であり、独り身ならぬ現役世代にはまだその機会は少ない。

10数年前に、自分にとって懸案の国宝を一両日のうちに、二つ観る事が出来た。三つある国宝の内の二つである。それぞれは異なるものでありこの言い方は不適切かもしれないが、私の望みとしてはその三つの国宝を一堂に並べて同時に見比べてみたいと思えるものである。随分前振りが長くなってしまったが、その三つとは「曜変天目

茶碗」と称されるものの事である。

## 曜変天目とは

台湾の故宮博物院へ行った折、その日、現物は観ることは出来なかったが、同院のミュージアムショップに、レプリカがあり、買おうかどうしようかと随分悩んだ茶碗がある。それは漆黒の地に星座のような星紋が微妙に配された模様があり、曜変ではなく色彩の変化はないが、それだけでも十分に美しい。かようなものを美しいと思うのは洋の東西を問わない。

かかる斑紋模様には「曜変」が重なって貴重な国の宝となる。「曜変」は「窯変」あるいは「熔変」が基とも言われるが、要するに陶磁器の焼成中に火焰の性質等によって、素地や釉薬(うわぐすり)に変化が生じ瑠璃色やコバルト色等の微妙な色合い、光彩が星紋部分に加わったものである(この表現のしかたは科学的には正しくないかもしれないが、肉眼で確認できるイメージ説明とっていただきたい)。漆黒の闇に輝く満天の宇宙を思わせるとも表現される。

但し、曜変の名称は中国で唱えられてそれが日本に伝播したものなのか、和製のものなのかすらはっきりしないようである。

黒い釉薬のかかった焼き物をわが国では

一般に天目と呼んでおり、中国は天目山の仏寺の常什(普段使いの什器というほどの意味か)であったのを、わが国の禅僧が持ち帰ったところからその名があるという。

天目茶碗は中国ではもともと大量生産された生活雑器であるが、そのなかで、南宋時代(12~13世紀)に作られた(意識して作ったのか、たまたま出来てしまったのかはこれまた人によって捉え方が違う)曜変天目茶碗は、現在世界に三碗しかないといわれ、その全てが日本にあるとの事である。室町時代、足利義満から義政の時代にもて囃された唐物の宝物を列挙した名品鑑定の秘伝書とされる『君台観左右帳記』(くんだいかんそうちょうき)にも曜変として載っており、当時のゲストハウスである会所で鑑賞されていたものようである。同書には、中国福建省の建窯で焼成された茶碗のなかでも「無上也。世上になき物也。」「万疋(まんびき)の物也。」としている。「一説に、足利義政所持の曜変天目は、織田信長に伝わった後、焼けてしまったという。この曜変こそ世に屈指のものだったと茶道具の名品録大正名器鑑は記す。」(日本経済新聞2002.1.6付)との話が本当だとすると今は亡き幻の逸品があったということになるが、残念ながら我々は他の現存するものを拝見するしかない。

### 曜変天目拝見

私が最初に曜変天目茶碗を目にしたのは、大阪東西線大阪城北詰駅そばの藤田美術館所蔵のもので、徳川家康が愛蔵し水戸徳川家に与えたとされている碗である。平日の閉館間際だったせいか、殆ど来館者もなく、小さな土蔵の二階にひっそりと置かれてい

る小振りの茶碗に初めて対面した。照明も暗く、大きな硝子ケースのせいで接近してみることが出来ない為、殆どただの漆黒の茶碗にしか見えない。こんなに地味なものかと驚きつつ、台の脇を見ると懐中電灯が置いてあり、これで茶碗を照らしてご覧下さいとある。弱い懐中電灯の光をあてると、やっと仄かな瑠璃色が見えた。しかしやはり意外なほど地味なものだなという印象は変わらない。

藤田美術館から東京へ戻ったその二日後、今度は世田谷の静嘉堂文庫美術館で稲葉天目ともいわれる曜変天目と対面した。折りしも11月の穏やかな日で、小高い丘の上の美術館まで緩やかな上り坂を、木洩れ陽を目に、風と木々の音を耳にしながら登っていった。美術館とその周辺の建物、丘の斜面を利用した庭園等なかなか落ち着いた趣のあるところである。肝心の曜変天目であるが、即、真正面に鎮座。写真やテレビ映像では何度も見ているが、その事前のイメージと比べても実物の印象は、とにかく派手。写真以上に色合いも濃く多様で、まがまがしいとまで思えるほどである。期待が大きかったが故に少々がっかり。しかしその理由の一つは、展示の仕方にあるのではないかと思う。照明が強すぎるのである。電気照明器具のない時代に、屋内で眺めていたものを、強力なスポットライトを当ててみるのが正しい観方とは思えない。宝石の展示会ではないのだから、もう少し落ち着いた柔らかな状況においてあげて、静かに鑑賞させて欲しい。そのなかではきっとその美しさがもっと感ぜられるのではないかと思う。谷崎潤一郎が礼賛するように、昔のものは、やはり、陰影のあるなかで接

したい。素人は贅沢で我侷なもので、暗すぎる地味すぎると思った二日後には、今度は明るすぎる派手すぎるというのだから始末が悪い。

二つの碗とも、口径 12 センチ、高さ 7 センチ前後のすり鉢状のものである。宋時代のお茶は白をもって最上とされたようで、そのお茶を引き立たせる為に黒い茶碗が作られるようになったようである。とはいってもおそらくもう長いことこの茶碗でお茶を点て、口をつけて飲んだ人はいないのであろう。それが出来たらなんとこの贅沢か。

三つの内二つを見たら最後の一つも見たいのが人情である。今ひとつの国宝は京都の大徳寺龍光院にある。こちらは一般公開していないため拝見するのは難しい。もっとも他の二つも美術館所蔵とは言いながら常時展示しているわけではないので、思い立ってすぐ観られるというものではない。

## 国宝展

1990年4月10日から5月27日にかけて東京国立博物館で開催された『日本国宝展』は、全国宝の約5分の1の213点を集めた大規模なもので、曜変天目茶碗も、静嘉堂文庫のものは展示されなかったが、藤田美術館のものもそして龍光院のものも揃い踏みし、さらに大阪市東洋陶磁器美術館所蔵の油滴天目、大井戸茶碗等主だった陶磁器も一同に公開されたようである。「ようである」というのは、私は残念ながらこの国宝展は観ていない。当時のパンフレットを最近見せてもらっただけである。そのパンフレットを会場で買った方に、どうでしたかと伺ったが、「天目茶碗？ さあて記憶にないな」というお答えでした。特別思い入れで

もなければ、200点を超える品々を一挙に観たら個々の印象は不鮮明にならざるを得ない。いつまたこのような国宝展をやってくれるのであろうか。

## 写真でみる曜変天目

藤田美術館で生の曜変天目を見た印象は前述の通りであるが、硝子越しでしかも接近できない状態で本物を観るよりは、残念ながら写真で見の方がその曜変具合がよく判る。但し、色身は印刷次第なので本物に近いかどうかはなんともいえない。本物を観ても照明具合でまた変わってしまうので、なにが本当の色合いかというのは決めがたい。私が見た写真の中では週刊朝日百科の『日本の国宝』No. 34 (1997年発行) の写真が一番拡大(実物の4倍位)してあって内側の斑文、虹彩がとてもよくわかる。斑文の内側は漆黒で、その縁の線、周囲、あるいはまた斑文とは関係なく漆黒の面に刷毛ではいたかのように、瑠璃色の虹彩が輝いている。静嘉堂文庫のものほどではないが決して地味なものではない。また、実物を見たときには気が付かなかったが、写真で見ると碗の外側にも小さい斑文が点在している。外側にも曜変現象が見られるのは他の二つにはない特徴のようである。

一方龍光院の写真は三つの中で一番少なく、私の知る限りその内側を一番はっきりと見せているのは、やはり週刊朝日百科の『日本の国宝』No. 20の表紙の写真である。斑文は他の二つに比べ、小振りが目立たない。しかも、斑文自体が全面黄褐色のものが多くある。虹彩も一番控えめであるが、瑠璃色の他に一部だがコバルト色の部分もある。桃山時代には冷える、枯れる天目が

もて囃されたとかで、同誌に解説を書かれている東京国立博物館工芸課陶磁室長の矢部良明氏の言によれば「妖艶な他の二碗の曜変よりも評価は高かったかもしれない。」とされている。

更に、改めて静嘉堂文庫の曜変の写真をみると、正直言って少々くどく、うるさく思えてしまう。やたらに斑文が浮き出て互いに干渉しあって、まがまがしさを感ずってしまう。素人の強みで独断と偏見から勝手なことを言ってしまう、私には藤田美術館の曜変の方が好ましく思える。

### 曜変天目は幾つあるのか

いつだったかのNHKの国宝を扱った正月の特集番組で、曜変天目も僅かだが取り上げていた。そこでの映像は静嘉堂文庫の曜変天目であったが、問題は、その際のナレーションで、曜変天目は世界に四つありその全てが日本にある、といったのである。国宝の曜変天目は三つしかないはずなのに、では第四の茶碗はどこにあるのか、またそれは何故国宝に指定されないのか。

最初は割れたりして完全な姿でないものがあるのかとも思ったがそんな話は聞いたことがない。次に、前述した織田信長に渡ったとされその後焼失してしまった幻の逸品のことを言っているのかとも考えたが、番組では「日本にある」といっており過去形では言わなかった。加賀の前田家伝来とされる、根津美術館が所蔵する油滴天目茶碗のことではないかとも思った。それは、古来、曜変として伝えられてきたが、他の三碗とは区別され、厳密には曜変とは認められていないものようである。写真で見ると限り素人目にも他の三つとはまるで違う

タイプである。

曜変天目茶碗のキーワードでインターネット検索（10数年前の話）をすると、私が見たものでは約220程あり、その中で数に触れているものの殆どは三つとしており、一部のもが三ないし四（四と明言しているものはなかった）としている。この言い方自体が不可思議であるが、そもそもネット情報はその大半が趣味の日記のようなものが半数、残りの大半が美術館の展示案内のようなもので、情報の質としてはあまり良くない。ただ唯一判ったのは、曜変天目茶碗といった場合にかかなり広義で扱われる場合があるということである。窯変の様々なパターンのひとつが曜変だとしたらそれ以外にも水面に油の滴を転々と垂らしたかのような油滴（ゆてき）天目、茶褐色の細かい兔の毛並みのような線状紋のある禾目（のぎめ）天目等があるが、それらも曜変天目と称しているケースが少なくない。ネット情報では静嘉堂文庫には国宝と重要文化財の二つの曜変転目茶碗があるとされていた。しかしその重文の方は、大河内風船子著『茶碗百選』（昭和59年版、平凡社）によれば、南宋のものではあるが福建ではなく華北の窯のもので、油滴天目とされている。写真で見ると限りでは、他の国宝の三つとは茶碗自体の形も違うし、斑紋の配され方も、色のつき方もまるで違う。信楽に四つ目があるとかないとかといったネット情報もあるが結局は曜変をどこまで広げて捉えるかということなのであろう。油滴天目なら龍光院にも重要文化財のものがある。

『やきもの辞典』（昭和51年版、光芸出版）によれば、「わが国に4点しかなく、いずれも国宝に指定されている。」として前述

の三つの他に、徳川黎明会蔵のものをあげている。ところが、国宝に指定されている茶碗は現在八つあるが、うち、三つは天目茶碗ですらなく、天目の五碗の内、曜変は三つしかなく、しかも後の二つの所蔵は大阪萬野記念文化財団と大阪市立東洋陶磁美術館である。同書の言う第四の国宝の曜変天目とは一体どれのことなのだろうか。

その後、『陶器講座 6 中国Ⅱ宋』（雄山閣昭和46年版）をみると、そこでは曜変茶碗は四つと言い切った上で、大佛次郎（勿論故人）所蔵の前田家伝来の重要文化財のものが第四の曜変天目だとしているが、これは前述した油滴のことと思われる。これが他の三つと並び称されるべきものかどうかは別として、四つといわれる場合の第四の曜変天目はこれを指しているのであろうというのが私の取り敢えずの結論である。

### 続 曜変天目は幾つあるのか

茶人高橋箒庵（そうあん）編纂の茶道具の名品集『大正名器』では次の六点が曜変天目茶碗とされている。①小野哲郎蔵、②藤田平太郎蔵、③龍光院蔵、④徳川義親蔵、⑤坂井忠正蔵、⑥前田利為蔵。①は稲葉家所蔵のものを大正七年に三井の小野哲郎が16万8千円で入手し、昭和9年に三菱の岩崎小弥太の手に渡り、岩崎家のコレクションを収める静嘉堂文庫に所蔵されているものである。②は徳川家康から水戸徳川家所蔵を経て大正七年に関西の藤田平太郎が5万3,800円で入手し藤田美術館に所蔵されている。③は龍光院のものであろう。前述した徳川黎明会所蔵のものが④であろうし、根津美術館の前田家伝来のものが⑥となる。

天目といった場合、釉薬の上り（色）からして黒い色の焼物を指すという意味と、鼈（すっぽん）口というかすり鉢状の形の焼物を指すという意味とがあるようである。この両方を兼ね備え、かつ虹彩の斑文が輝くものを曜変と決め付ければ、日本にそして世界に曜変天目茶碗は三つしかないということ個人的には結論づけたい。

### 南宋のものなのに何故日本にしかないのか

前述の週刊朝日百科『日本の国宝』No. 20で矢部良明氏は次のように書かれている。「天目の頂点に立つのが曜変であった。窯址の調査は現在、福建省がかなり力を入れて進めており、その天文学的数字になるであろう膨大な陶片は天目で占められているようであるが、まだ曜変の破片は認められていないという。曜変がどれほど僅少であったかがわかろうというものである。」確かにそうなのであろうが、何か今ひとつしっくりこない。それほど貴重なものが何故日本にしかないのかわからない。かくも貴重なものを国外に持っていかせるであろうか。本当に貴重であれば、宋の時代においても意図的にもっと作ろうとしたであろうし、そうであれば出来そこないの曜変茶碗やその破片がたくさんあるはずではないのか。

もしかすると、当時の中国において曜変天目は、必ずしも貴重なものではなかったのかもしれない。

窯変が多く起きるのは、「窯炉が不完全であり、焼成技術も不十分な時代の出来事である。要するに失敗作とも言えるものであるが、良くしたもので、それらの中には案

外に魅力に富んだ、とても捨てる気になれないようなものも含まれることがある。それがむしろ名品として珍重されると、その再現に熱中する人々がいて、いわゆる窯変物の製作が行なわれることになる。」(黒田永二著『焼き物の謎に迫る』平成8年販、裳華房)。

中国ではこの様な規格に外れたものは傷ものとして高い評価を与えないとも言われる。まして青磁、白磁のような官用の芸術品と違い本来日用品として作られた天目茶碗の傷ものは無視されたのかもしれない。だからこそ日本の留学僧が持ち出せたのであろう。中国でも価値あるものとされていたら今でも複数の曜変天目茶碗が中国本土か台湾にあるはずである。

日本の焼き物の美は“不完全の美”だといわれることがあるが、完全無欠の極みが中国皇帝の所蔵する青磁、白磁だとしたら、偶然出来た曜変天目なる出来そこないの日用品はそれこそ不完全なるものの極みであり、まさに日本人好みなのかもしれない。

最近になって曜変を作っていたのではないかという窯跡が発見されたとかいう話も聞こえてきているが、それでもなお典型的な曜変の破片が複数出てきたということではないようである。今後の調査結果が待たれる。

### 偶然出来たのか、意図的に作ったのか

南宋時代の福建の窯跡を探しても曜変のかけらが殆ど見つからないのだそうである。日用品製作の過程で不完全な技術であるが故に偶然出来た物であるのなら、何故完全な形の物が数点あるだけなのか。かけらや欠けた茶碗が多くあってもよいのではない

だろうか。お堀端の出光美術館では世界の陶磁器の破片を常時展示しているが、瑠璃色の曜変のものは見たことがない。一方、曜変技術が確立されていて意図的に作ったのだとしたら、もっと多くの実物があるはずである。曜変が何故起こるのか、その科学的原理はどうなっているのかと研究された方、論文、著作も複数あるが、単なる素人ファンとしてはその辺はどうでもいいことである。また、この曜変天目を自ら作り出そうと努力されている方は過去にも現在にも数多くいらっしゃるようであるが、実現して欲しいような欲しくないようななんともいえないところである。憧れが減ずるような気がしつつも、美しい碗が私にも購入出来たら、実際に掌に包んで眺められるかもしれない。そうなったとしても二つと同じものはなくそれぞれが独自の色彩の組み合わせを持つ、例えば不適切かもしれないがブラックオパールのようなものといえるか。もっとも「セレブなあなたもステータスとして世界にひとつしかないmy 曜変天目をおひとついかがですか。」といったセールストークが巷に溢れたら、憧れもロマンもありませんが。

### 続 意図的に作ったのか

前述したように、私は作陶の趣味自体ないし、曜変転目を作り出す事はあまり関心がないが、もしこれからチャレンジしてみたいとふと思いついた方には、30年間の日々を曜変天目作りに向けた安藤聖氏の言葉をお伝えしたい。「あらゆる娯楽を避け、全ての人生を賭ける執念で挑んで欲しい。」

仕事ですら一つのことには賭けるのは嫌なのに、まして趣味の世界で一つのことには賭

けるなど私には真っ平御免。趣味と仕事と人生をそのただ一つのものに賭けることが出来る人は、それはそれで幸せなのであろうが、気の多い凡人にはとてもそこまでは入り込めない。

そしてなにより、国宝の三碗の曜変天目茶碗は諸々考え合わせると、私には意図的に作ったものとは思えない。偶然出来た奇跡の茶碗ということにしておきたい。

### 少女漫画にも登場

人気少女漫画家の一条ゆかり氏の『有閑倶楽部』なる連作ものがある。他愛もない荒唐無稽のギャグ漫画であるが、根強い人気があり、次々単行本化されている。その中に、曜変天目茶碗が中心となって展開する話が出てくる。そこでは国宝は三つあるとされているが、話が進むとそれとは別の第四の曜変天目茶碗が登場し、しかも主人公の一人がそれを割ってしまい、更に美術品の贋作造りのプロまで登場してくるといふ、曜変ファン（漫画のではない）にとっては大変過激な内容。まあギャグマンガの中のことですからお許しください。

### ミステリー小説『曜変天目の夜』

恩田陸氏の短編に曜変天目茶碗が出てくる作品がある。悪魔的ともいえる曜変の妖艶さがミステリーの世界へつながっていくという、格好の素材と思えるが、残念ながらこの作品は主人公が、自然死したと思っていた初老の友人が実は毒入りの紅茶を毎日飲みつづけて自殺したということになって気がつくというストーリーで、曜変天目茶碗はその友人の行動にも、主人公の謎解きにも直接関係してこない。アニメ映

画で賞も獲った『あたま山』の原作たる落語話と曜変天目と自殺話との結び付けが上手く出来ているとも思えない。著者は曜変天目という言葉に魅力を感じただけで、茶碗自体には大して惚れてないのではないかという気がする。

「あたしも見たわ、あの茶碗。すごいわよね、見た瞬間はショボイなって思うんだけど、何度も見てるとだんだん鬼気迫る感じがしてくるのよね」と美術館（静嘉堂と思われる）の茶碗を見た主人公の娘に語らせているが、私の思うところとは全く違った印象である。著者が現物を見たのなら「ショボイ」という感想は出てこない気がするし、意図的に登場人物にそう言わせたのだとしたら、そのような感想を持つものが鬼気迫る感を受けるまで見つづけるのは人物像として不自然に思える。題名だけから過度に期待した私が間違っておりました。

### 陶器が主人公の小説

テイボール・フィッシャー著『コレクター蒐集』なる小説は碗が主人公として自分の周りの人間達を記憶し語っていくという不思議な話。残念ながら私もまだ読んでいないので語ることが出来ない。和洋女子大学の三浦俊彦氏の書評によれば自由に姿を変えられる知的生物が6000年以上陶器の形を取って、自分を所有する歴代のコレクターを記憶中に蒐集している話だそうである。

### 陶磁器と音楽

石を使った楽器、グラスを使った楽器はある。小皿叩いて「チャンチキおけさ」を唄う人もいる。多少不安定ではあるが、茶碗でもそれは可能である。しかし、石の打

楽器や、水を入れたグラスのようなちゃんと音階のある楽器として茶碗が使われているかとなると、残念ながらその実例を私は知らない。

茶碗にサイコロを転がしてチンチロリンと鳴ってもそれは音楽とは言い難い。しかし、曜変天目茶碗にサイコロを転がしたら如何なる音を奏でるのであろうか。

歌の中に出てくるかとなると、“紅茶”や“コーヒー”、“コーラ”、“アルコール類”はポピュラー音楽にも、日本の歌謡曲にも出てくるが、器の方はなかなか出てこない。「ブランデーグラス」は曲名にまでなっているが、茶碗も壺もずばりは出てこない。“真っ白な陶磁器”は小椋桂の歌詞の中にでてくるが、イメージとしては有田焼きだろうか、ジノリだろうか、歌の主人公の境遇からすると名もない安食器かもしれない。「茶色の小ビン」は曲名ではあるが焼き物ではない。「黒田節」で酒を飲むのは、焼き物のぐい飲みではなく塗りものの大杯であろう。『アンパンマン』に井物はたくさん出てくるが、いずれも食べ物である中身が大事であって井の器だけが独立して人格を持っているわけではない。お酒はぬる目の爛が良くても、お銚子が唄いこまれる訳ではないし、あぶったすめが載っている皿が歌に表現されることもない。

アルゼンチンタンゴの中には邦題「交わす盃」TOMO Y OBLIGO という曲があるが、原題には杯という言葉は出てこない。他にも「忘却の盃」LA COPA DEL OLVIDO という曲もあるが、一番有名なのは「最後の盃」LA ULTIMA COPA であろう。歌詞からすると使っているのはシャンパングラスである。フォルクローレの中に「素焼きのかめ」と

いう歌があり、こちらは間違いなく粘土から作った焼き物なのだが、用途はどうやら棺のようである。どうやら陶磁器なるものはあまり音楽家の感性を揺り動かすものではないらしい。

## トプカピ

焼物の棺といえばオスマン・トルコの最初の都ブルサにあるスルタンメフメット一世(1421没)の棺は、赤、黄、緑で彩色された花模様の台の上に置かれ、アラビア文字をあしらったタイルが装飾された華々しいものである。写真でしか観たことはないが、イスラムの美の極みと言うか、まがまがしさの典型というかイスラム美術好きの身にも少々辛い代物である。同じオスマンの華々しい物でも、宝石つき鏡(あぶみ)の方がまだ受け入れやすい。トルコ年の2003年に東京都美術館で開催された『トルコ三大文明展』で観た鏡は写真よりずっと美しかった。そして更に、同展ではトプカピ宮殿のエメラルド入り短剣の現物をついに観ることが出来た。1964年アメリカ映画『トプカピ』(ジュッレス・ダッシン監督、出演メリナ・メルクーリ、マクシミリアン・シェル、ピーター・ユスチノフ他)を子供の頃に観て以来の憧れの逸品である。勿論硝子越しにしか観られないが、大粒のエメラルドは意外なことに写真でみるよりもずっと綺麗で魅惑的であった。手にとって見られないお陰か内包物もあまり見えないし、緑色は深く濃い。最近加熱加工品ではあるだろうが、安っぽい巨大エメラルドが多く売られている。その飴玉のような色とは格段に違う、まさに稀代の宝石という貫禄であった。この秘宝が日本に持ち込まれたのは初



めてとのことであるが、トルコ展の開催を知らずにちょうど今イスタンブールへ旅行してなくてよかったと思った次第である（実は知り合いにそういう不幸な人がいました。お気の毒！）。同展でも焼物がいくつか展示されている。オスマンの面白いところは、単に財力にあかして中国の焼物を輸入するだけではなく、更にそれにイスラム感覚の金属の加工を施すところである。香炉、瓶、水差し等であるが、素となっているのは元、明、清の白磁、青磁、染付けのものである。今回の展示には茶碗はなく、まして曜変したようなものは全くない。貴重な輸出品にはかような出来そこないは選ばれないということなのだろうか。

### 陶磁器と映画

『トプカピ』をはじめとして、映画では宝石をめぐる怪盗が活躍するストーリーは山のようにあるし、一枚の切手をめぐる殺人事件まで起きたりするが、茶碗をめぐる大きな事件は起きていない。コレクターが異常に執着して集めるのは蝶であったり、人間であったりするが、陶磁器は蒐集していない。題名に“マイセン”が出てくる映画はあるが、カップよりも陶磁器の人形がメインである。カクテル、テキーラ、ラム等のアルコール類は題名に出てくるが、そのどれも茶碗では飲まない。二人で飲むお茶も、バグダッドカフェで飲むお茶も天目茶碗は使わない。民放の二時間ドラマでは骨董品や高名な作家の焼き物をめぐって殺人事件が起きることはたまにあるが、ひとつの茶碗の怪しい魅力のせいで、人が悪魔になってしまうほどの強烈な個性を与えられているわけではない。水晶玉の

ようなボールあるいは一個の指輪が、一族を滅ぼしたり、世界を、宇宙を手に入れるほどの力を持つという設定がされることはあっても、茶碗がそれだけの力を秘めているというストーリーは聞いたことがない。油のランプからは三つの願いを叶えてくれる魔人が出てくるが、壺からはまるで頼りにならないデベソの大魔王しか出てこない。

### 信長が持っていたとされる無上なる曜変天目茶碗はどこで焼失したのか

当初、謎の四つ目の茶碗かとも考えた信長所有の茶碗であるが、如何なる物であったのか。何故失われてしまったのか。焼失というと天正10年(1582)6月2日信長と共に本能寺で燃えてしまったのか。津本陽氏の書かれたものをみると、安土城から持ち込んだ茶器は38種あるとされるが、犬山灰かつぎ天目等の幾つかのラインアップの中にはないようである。もしその中にないとすると、後日安土城炎上とともに焼失したのか。ひょっとして誰かが持ち出して今も何処かにあるのか。本能寺か安土城にあったが、比較的火焰の影響を受けないところにあり、地面の中でいまだに人目に触れずに隠れているのか。勝手に都合のいい空想だけならきりが無い。

### 続 信長の曜変天目茶碗

信長が持っていたものは嘗て足利義政が所蔵していた名碗であり、『名物目利聞書』には、信長がこれを愛用し、いつも懐に入れて持ち歩いてきたため、本能寺の変で焼失してしまったという記述があるそうである（『国宝への旅2』（NHK出版）p.273）。しかしいつも懐に入れていたとは信じがたい、

まして寝るときにも身に付けていたとは到底思えない。光秀が本能寺を襲ったときに、寝ていた信長が慌てて茶碗を懐に入れるとも思えない。本当に信長が本能寺で切腹したとしたら、当然懐の茶碗は邪魔である。本能寺が焼けた後、光秀軍は信長の死を確認する為に、焼け跡をくまなく調べたのではないか、そこに割れたりしてはいても貴重な陶磁器が見つからなかったのであろうか。本当に焼失してしまったのであろうか。

### 板谷波山の窯変天目

出光美術館の『板谷波山展～神々しき匠の技～』を平成15年3月に観てきたが、その展示品のなかに、陶磁器の古今東西の破片を飾ってある部屋に、波山が使っていたという窯変天目を焼くための「さや（帽子ともいっている蓋のついた鉢）」があった。この帽子の内部に辰砂（しんしゃ）釉をかけ高温で蒸し焼きにすると、釉が溶けて茶碗に飛び散って窯変となる、との説明がついている。波山も曜変天目を作っていたのか、それは現存するのか、展示品の中にあるのか、と思い時々美術館内を見たが天目茶碗が二つあるきりで他にそれらしきものはない。その二つとは、昭和19年（後述の本では昭和16年となっている）に作られた萩焼き風の複数の色が美しく重なった「命乞（いのちごい）」と昭和34年に作られた闇夜に星が瞬くがごとき「星月夜」である。どちらも美しいが、何れも国宝の三つの曜変天目とは違うタイプのものである。現品の脇に置かれている展示品の品名札にも「天目茶碗」としか書いてない。

ところがその札をよく見ると英文が併記してあって、そちらの方は「Yohen Temmoku

Ware」と記されている。波山は確かに窯変天目をつくっていたが、それは私が求める曜変天目とは異なるものであった。でも、「命乞」はなかなか魅力的。個人的には波山のもは焼き物以上に素描が好ましく思えた（その後2,200点に及ぶ素描集全六巻が発刊されている）。次々溢れ出でくるイメージとそれを形あるものに表現できる技量を合わせもった天才に脱帽。

波山展会場で、「命乞」とはまた妙な銘だなど思ったのであるが、その後、新橋の青空古書市で手に入れた『日本のやきもの＝現代の巨匠1板谷波山』（1977 講談社）によるとその由来は以下の通り。名づけたのは波山本人ではなく、波山の熱烈なファンであり支援者であった出光佐三氏（当時出光興産(株)店主）である。窯開けの日、波山が焼きあがりの作品を気に入らず次々と壊していくところを、佐三氏がこれは是非壊さずに私に譲り受けさせてくれと懇願し、作者本人の破壊の手から救い出した茶碗だということで、早速箱を作り、自ら「命乞いの茶碗」としたためたとの事である。

### 国宝の焼き物はなぜ少ないのか

国宝1,059点の中で、焼き物は14点しかない。その数は工芸の分野で比較しても刀剣の122に対して非常に少ない。しかもその焼き物の内、国産のものは僅か5点しかない。更に鳥型の香炉1点、壺2点を除くと国産の国宝の茶碗は本阿弥光悦の楽焼と志野茶碗の2点を数えるだけである。この原因について、芸術新潮編集部編による『国宝』（1993年刊）の記述によると「国宝選定の原案を作成する文化庁の文化財保護部美術工芸課に陶磁専門の調査官が置かれて

いなかったことにも関係があるようだ。」と  
 いったことが考えられる。あるいはまた、  
 茶碗はお茶を点てて飲むものであり、花瓶  
 は花をいけるものである、国宝に指定され  
 て本来の用途として使えなくなっはせつ  
 かくの名品がなくと思ひ、所有者が指定を  
 辞退するのもかもしれない。骨董の世界でも  
 長く使い込まれて初めてその色や艶、光沢  
 が素晴らしいものになるという。それがな  
 ければただの古いものでしかない。古いと  
 いうことが長く使われて年輪を増すことで  
 価値が高まると思えるからこそ、新品には  
 ない良さが受け入れられるのであろう。お  
 茶の飲めない茶碗は茶碗ではない、それ  
 では本来の価値がない。誰にも確かめる術は  
 ないが、もしかすると今の曜変天目茶碗は  
 室町、安土時代に比べ美しさが減じてい  
 るのかもしれない。もっともそんなことをい  
 うと、人を斬らない刀剣は・・・というこ  
 となってしまうのでこれ以上は追求しな  
 いこととする。

剣といえばその妖しいまでの美しさ、切  
 れ味から愛媛に吹毛剣、七星剣なる酒があ  
 る。「吹きかけた毛を切るほどの鋭利な剣」  
 (太田和彦著『ニッポン居酒屋放浪記立志  
 篇』)はたまた「引き抜くと七ヶ所に光芒が  
 立つ」(同上)というのだからさぞや味冴え  
 渡るのであろう。剣が酒造りのイメージ  
 ションを掻き立てたのだとしたら、曜変天  
 目の名を冠した酒が登場しないものであ  
 ろうか。悪酔いしそうな気もしないではない  
 が・・・

## 曜変天目に触れた人

作家の宮尾登美子氏はNHKの番組『国宝  
 への旅』で、藤田美術館蔵、静嘉堂蔵の夫々  
 の茶碗を数日の間に太陽光の下で直に手に  
 取らしてもらったそうである。同氏は、前  
 者については、「・・・(途中省略) 意外な清  
 冽さだった。・・・星紋は新鮮で美しく、いく  
 ら眺めても見飽かぬ魅力がある。」とし、後  
 者については、「かねて図録で見ると、星紋  
 がはっきりと大きくあらわれており、私に  
 は異相の茶碗という印象だった。たとえて  
 いえば、アミーバーのような星紋のいちめ  
 んに散らばったその肌は、まるで爬虫類の  
 如く、薄気味悪いという他はないのであ  
 る。」と思っていたそうであるが、現物を間  
 じかに見て、「図録とは全く違って、紅、群  
 青、緑、黄、とさまざまな色に輝いており、  
 思わず息を呑んだほど威風凛々を払う格が  
 あった。」とされている。

氏の感想が、もっともなものとするれば、  
 静嘉堂文庫で猛烈なスポットライトをあて  
 た展示の仕方、それ以上の光源のもとで撮  
 られたかもしれない写真映像は、茶室で障  
 子を通した自然光やろうそくの明かりのも  
 とで観られていた印象とはかなり違ったも  
 のを我々に与えているのではないかと思え  
 る。

## 曜変天目を造ろうとする人たち

以前に、『幻の名碗 曜変天目に挑む』と  
 いうテレビ番組が、日本、中国三人の曜変  
 天目作成に執念を燃やす陶工を紹介してい  
 た。一人は愛知県瀬戸市の長江惣吉氏。染  
 付け焼きの九代目である。八代目がのめり  
 こんだ曜変天目を完成させるべく中国より  
 40トンもの土を輸入し、釉薬の調合は700

種を超える。いま一人は岐阜県土岐市の林恭助氏。黄瀬戸という桃山時代の美濃焼の作家である(黄瀬戸の器もいいですね)。最後は中国福建省南平市の孫建興氏。同氏は宋時代の陶片を観察研究して当時と同じような作り方を再現しての完成を目指している。といっても当時の作り方が解明されているわけではなく、斑文の素になる物質をあらかじめ筆でつけて焼く氏の作品は、映像で見る限り、国宝のものとは色合いも違うし、輝きもない、一言でいえば美しくない。林氏は僅か5年で個展を開くまでの衝撃的な作品を完成させた。林氏が2002年10月1日から一週間日本橋三越で開いた10点の曜変天目作品の展示会は同年10月19日の日経の記事に依れば高い評価を得たようである。然しながら氏の曜変天目はまず黒い茶碗を焼き、それに人為的に手を加えて二度焼して作っている。結果を見ればそれなりのものなのだが、国宝の曜変天目はそのようにして作られているのだろうか。素人目にも、特に藤田美術館、大徳寺の二つは黒焼きに手を入れて二度焼したのものとは思えない。番組では林氏の成功を知った長江氏の苦悩を紹介していたが、氏はあくまでも一度焼で酸素の調整で釉薬の変化をコントロールして作ろうとしており、番組の最後にはかなりの出来栄えのものを作り上げている。

自主製作の先輩、安藤堅氏は、上絵付けでしかも二度焼きは本当の曜変ではないとして、後進に対して「正しい追求の道を歩んで、命懸けで取り組んでほしい」と語っているが、数多の人に命までかけさせる(安藤氏は製作中に心臓発作に見舞われている)曜変天目とはなんと罪作りの代物なの

だろう。

素人感覚で三碗のうち、正嘉堂文庫のものは他の二碗とは少々異質な感じがする。もしかしたら、これだけは二度焼したものではないだろうか。曜変にも製作手法タイプⅠとタイプⅡがあり、三碗とも国宝として認めているのならどちらの作り方が本物、偽者ということはないのかもしれない。然しながら、人為的に模様をつけた焼物では単なるデザイン画になってしまい、ロマンの香りが消えうせてしまう気がする。

## おわりに

結びに三つ目の大徳寺龍光院の茶碗を観た章を書きたいのだが残念ながら未だにそれは実現できていない。実は十数年前に大徳寺龍光院まで出かけて行ったことがある。同寺にはたくさんの院があり、多くは一般には公開されておらず龍光院にも入る手だてがなく、思案に暮れていると裏口からおばさんが出てきた。これ幸いと住職に逢えないだろうかと同うと夕刻には戻るので直接きいてみたらと電話番号を教えてくれた。日が落ちて何度目かの電話でご住職と話をすることが出来た。話のやり取りは勝手に活字にするわけにもいかないので触れないこととするが、結論は否。美術館ではなく寺の所蔵物であるから、突然現れた一般人に見せてくれるとははなから思っただけではないが、秘蔵の仏像でさえ何年に一度かは御開帳することもあるのだから、国宝の茶碗をしまいこんで日本国民に見せてくれないのもいかなものかとは思いますが、いたしかたない。といいながらなおしぶとく綿々と手紙をしたためて送ってみたが、お返事はいただけなかった。しつこく毎年手紙を出

してみようかとも思ったが、狂信的変質者と思われても不味かろうと差し控えることにした。生きている間に何とか巡り合っ

てこの中途半端な一文を完結させたいものである。

